

オリーブの会通信

مجموعة الزيتون

2025年5月20日第54号 (通巻60号)

オリーブの会

大阪府豊能郡能勢町平通101-453

tel/fax:072-737-9454

mail: oribunokai@gmail.com

facebook:oribunokai

blog: olivenokai.hatenablog.com



援助物資が国境のエジプト側に9000台のトラックと共に止められている

3月18日にイスラエルが停戦合意を破棄して、ガザへの攻撃の拡大と、援助物資の搬入をとめ、ガザでは人工的に引き起こされた飢餓が広がっている。ガザの停戦を仲介するとしていたトランプは、直接交渉で米国籍のイスラエル人質を解放しただけで、停戦をしようとしないうイスラエルの圧力もかけず、中東訪問でイスラエルを外して、サウジ、カタール、UAEを訪問し、ガザの停戦ではなく、これら国から多額の投資を引き出したことで、成果とした。

こうした事態の中で、ついに欧州がイスラエルへの圧力をかける方向へと初めて動いた。

欧州の転換、イスラエルへの圧力を初めてかけた

欧州諸国は、これまでイスラエルの自衛権を認めるとして、イスラエルの軍事行動を支持してきた。とくに、英国は、英国軍の偵察機を出すなど、軍事的にも協力してきた。

しかし、イスラエルがハマスの拠点を攻撃という口実を使ってきたが、イスラエルが証拠をしめしたこともなく、ガザを破壊し、民族浄化の口実としていることが明確になってきた。援助物資、食料、医薬品、水、燃料など生存に最低限必要なものの搬入を拒否し、さらにガザの医療施設、水工場、パン屋、農地などを破壊し、人間の生命維持に必要なものを破壊しつづけ、さらにガザの住宅の系統的な破壊だけでなく、追い出された住民が避難しているテント村や学校を攻撃し、死者を拡大させ続けている。そして、南部、北部を占領し、ガザの住民を

狭いところに追いやったうえで、空爆、ドローン、砲撃などで攻撃し、殺しまくっている。そして、ガザを人間が住めない状態にすることで、住民をおい出し、ガザをイスラエルの占領下に置こうとしている。米国は、和平の仲介は口先だけで、ガザの住民の追い出しを支持し、その移住先を探すことまで、行っている。

このような事態の中で、世界中で抗議行動が拡大し、欧州でも拡大し、反セム主義として弾圧ができない状態になり、欧州の政府自身がイスラエルとの関係を見直すことになった。

トランプの中東訪問とイスラエルの戦闘のガザでの拡大

米国のトランプは、停戦を仲介するとしていたが、イスラエルが停戦を破棄し、ガザでの戦闘の拡大、物資の搬入の完全な封鎖に出た。イスラエルは軍事的圧力だけが、人質の解放ができるとしていたが、それも実現されず、米国は、直接ハマスと交渉して、米国系イスラエル人の釈放を勝ち取っている。イスラエルのやり方では人質の解放勝ち取るとはできないことをしめした。しかし、こうした齟齬にも関わらず、米国は、物資搬入妨害を支持している。そして国連ではなく、米国の民間会社で、物資を配布するとしている。それは、ハマスが物資を盗むのを阻止するためであるとしている。しかし、これまで援助物資を盗んでいたのは、イスラエル軍に支援されたパレスチナ人のギャングであり、それを防ぐためのガザの警官はイスラエル軍が殺害している。そして、国連が批判するように、イスラエル軍や米国の民間会社

では、援助会社による配布の公平性や中立性が担保されないと批判している。このイスラエルの飢餓の武器化は世界中で批判されている。

西岸での民族浄化が進む中で自治政府は

西岸においてもジェニン、トルカラムなど地域で占領軍と入植者による民族浄化がすすんでいる。自治政府は、民族浄化に抵抗するのではなく、PLOの中央評議会3月に開き、フセイン・アルーシェイクを副大統領とし、イスラエルに媚びる人事を行い、他の諸派は分裂を促進するものとしてボイコットした。さらに、ガザの戦後で自治政府のもとでハマスの武装解除をするという、ハマスからも反発を受けた。しかも、イスラエルは、自治政府も、ガザを支配することをみとめていないにもかかわらず。

イスラエル側のエルサレムで山火事が起こったときに、イスラエルが望んでもいない消火活動へ協力を申し出るなど、ガザでイスラエルが民間防衛や赤新月社の職員が殺害されているにも関わらず。

5月21日にアッパースはベイルート訪問し、パレスチナ・キャンプの武装解除に合意した。これは、レバノン政府の武力の国家への集中の政策によるものである。しかし、ヒズボラも武装解除を認めて居ない。

抵抗運動は、ガザでの戦闘だけでなく、西岸でも抵抗闘争を続けている。

イスラエルのガザへの攻撃の強化に対して、カセム旅団、コッズ旅団などの抵抗勢力は、ゲリラ戦で、占領軍への攻撃を続けている。また、イスラエル国内へのロケット攻撃もとまっていない。また、イエメンのフーシー派もイスラエルへのミサイル攻撃を、米英による攻撃にも関わらず、継続している。ミサイルはイスラエルのベングリオン空港へ到達し、イスラエルへの国際航路をとめることになった。

ハマスは、5年の停戦と人質の交換を提案しているが、イスラエルは受け入れず、戦争をつづけている。このイスラエル政府の立場は、イスラエル国内からも批判が出ている。極右の入植者を除いて、イスラエル国民も停戦と人質の解放を求めている。

イスラエル内での停戦求める行動の拡大

イスラエル国内では、予備役のパイロットから始まった停戦を求める署名運動は、予備役全体に拡がり、さらに文化人や学者に拡がっている。また、元軍事指導者も、虐殺の戦術に抗議している。また、兵員の間で、負傷者だけでなく、精神的な障害を負うものが増えている。しかし、ネタニヤフと極右閣僚たちは聞く耳を持たず、虐殺を続けており、それは、イスラエルの国際的な孤立化

を深めている。欧州だけではなく、イスラエルの最大の庇護者であるトランプ政権とも齟齬が起るようになってきている。

世界での抗議行動が拡大、その力が欧州を動かした

日本を含めて、世界中で、虐殺に抗議する行動が拡大した。その中には、ホロコーストの生き残りのユダヤ人もおり、欧州特に、イギリス、オランダなどで50万人を超える抗議行動が拡がり、欧州各国も、これまでのイスラエルよりの態度を変えなければならなくなった。イスラエルへの武器供給をしていた英国が、態度を変更した。EUは、イスラエルとの自由貿易協定の見直しを行っている。

これまでは、ハマスのテロの非難に終始していたが、イスラエルによるガザでのジェノサイドは、イスラエルの自衛権利を越えたものであり、明確にガザでの民族浄化が明確になってきていることでようやく、欧州もイスラエルへの圧力を掛けている。

おりしも、ナクバ77周年になってからである。

アメリカが放り出した、国際的圧力がたかまり、イスラエルを動かし始めた。

停戦の仲介を表明していた虐殺がとまらないことで、イスラエルを放り出して、アラブ諸国を周り、多額の商売を成立させる方向に動いた。また、トランプ政権は、ウクライナ戦争でも戦争をとめることができない状態で、かれのノーベル平和賞の道は遠のいている。その状態で、欧州がこれまでイスラエルの態度変更し、関係を再検討する方向に動き始め、国際的な圧力が強まったことは象徴的である。おりしも、5月21日に欧州を含む外交官の西岸を視察した際にイスラエル軍が発砲したことは、二重に特徴的である。イスラエル軍は、警告発射したと言っているが、録画されている画像では、銃口を水平に向けており、通常の警告発射ではないことは、明らかである。こうした事態を挽回するために、5月22日米国で起こったイスラエル大使館員の殺害を自分たちの正当化に使っている。こうした事態が起こったときは、これまでほとんどがイスラエルの自作自演が多かったが、今回の場合はまだわからない。イスラエルとトランプ政権は、この事件を最大に反セム主義の宣伝に使うだろう。

この転換を最大に生かすためには、さらに国際的な世論を高めていく必要がある。



ナクバから77年、私たちは新たな廃墟に名前をつけます。

025年5月16日金曜日、ガザ地区北部ジャバリア近郊でイスラエルの空爆が行われ、立ち上る煙を見つめるパレスチナ人。(AP通信/ジェハド・アルシュラフィ)

1948年に始まったものは、さらに暗いものとなりました。この記念日に、私たちはそれを「アル・イバーダ」、つまり「破壊」と名付けます。

ガダ・アゲル
政治学教授

2025年5月16日公開

1948年5月、私の祖母ハディージャ・アマルがベイト・ダラスの自宅を最後に出て行った時、彼女は孤独な旅に出た。シオニスト民兵による恐怖から逃れるため、大切な家と土地を後にせざるを得なかった何十万人ものパレスチナ人と共に旅立っていたにもかかわらず、世界中に彼女の姿を見守る者は誰もいなかった。彼らは共にいたが、完全に孤独だった。そして、彼らの悲惨な体験を言葉で言い表す術はなかった。

やがて、パレスチナ人は1948年5月の出来事を「ナクバ」、つまり大惨事と呼ぶようになった。この文脈における「ナクバ」という言葉の使用は、もう一つの「大惨事」、ホロコーストの記憶を想起させる。パレスチナ人は世界にこう訴えていた。ヨーロッパのユダヤ人を襲った大惨事からわずか3年後、私たちの祖国パレスチナで、全く異なる、しかし決して劣らない新たな大惨事が起こっているのだ。

悲しいことに、私たちの大惨事は決して終わることはありませんでした。祖母が追放されてから77年経ちましたが、私たちは依然として、尊厳を持って土地で暮らそうとしたり、帰還を要求したりしたために、追い詰められ、罰せられ、殺されています。

ナクバが真に終わることがなかったため、歴史的出来事として記念することは常に困難でした。しかし今日、ナクバを理解し、議論し、追悼しようとする私たちには、新たな課題が突きつけられています。それは、ナクバが新たな、そして恐ろしい段階に入ったということです。もはや77年前に始まった恐怖の単なる継続ではありません。

ん。

今日、ナクバはアムネスティ・インターナショナルが「ライブストリーミングされたジェノサイド」と表現したものにへと変貌を遂げました。その暴力はもはやアーカイブに隠されたり、生存者の記憶に埋もれたりすることはありません。苦痛、血、恐怖、そして飢餓はすべて、私たちのデバイスの画面上で目にすることができます。

したがって、「ナクバ」という言葉は、今日、私の同胞と私の祖国に行われていることを表現するのに適切でも十分でもありません。新しい言葉、パレスチナの大惨事のこの新たな段階の現実を正確に表現する新しい用語が必要です。世界が目をそらした目をパレスチナに向けさせるのに役立つような新しい言葉が必要です。

この目的のために多くの用語が提案されており、私も執筆の中でいくつかを使用しました。これらには、デモサイド（民主破壊）、メディサイド（医療破壊）、エコサイド（環境破壊）、カルチュリサイド（文化破壊）、スペースサイド（空間破壊）、ガザサイド（ガザ破壊）、スコラスティサイド（学問破壊）が含まれます。これらの用語はどれも、今日のパレスチナで起こっていることの重要な側面を間違いなく定義しています。

学者として私が特に力強く感じている用語の一つは「スコラスティサイド」です。これは、パレスチナ人の知識が現在も組織的に抹消されていることを明確に示しています。ガザのすべての大学は破壊され、学校の90%は瓦礫と化しました。文化センターや博物館は破壊され、教授や学生は殺害されました。優れた学者であるカルマ・ナブルシによって造られた「スコラスティサイド」という言葉は、パレスチナの教育機関の物理的な破壊だけでなく、記憶、想像力、そして先住民の知性そのものに対する戦争をも表しています。

私が印象的で意味深いと思うもう一つの用語は「ガザサイド」です。ラムジー・バルードによって広められたこの言葉は、歴史的パレスチナのこの特定の一角を標的と

した、一世紀にもわたる抹殺、強制移住、そしてジェノサイドのキャンペーンを指しています。この言葉の強みは、この犯罪を歴史的にも地理的にも位置づけ、ガザをジェノサイド的暴力の中心地として直接的に名指しする点にあります。

これらの言葉はどれも力強く意味深いものですが、どれもあまりにも具体的であるため、近年のパレスチナ人の経験の全体像を完全に捉えることはできません。例えば、「ガザサイド」は、占領下のヨルダン川西岸地区や東エルサレム、あるいは地域全体の難民キャンプに暮らすパレスチナ人の現実を包含していません。一方、「スコラスティサイド」は、パレスチナ人の土地を先住民が居住できる場所にするというイスラエルの明らかな決意には触れていません。そして、前述の言葉のどれも、イスラエルが宣言したガザに対する意図、すなわち完全な破壊には触れていません。5月6日、イスラエルのベザレル・スモトリッチ財務大臣は「ガザは完全に破壊されるだろう…そしてそこから〔市民は〕大量に第三国へ移住し始めるだろう。」

そこで、私はナクバのこの最新段階を定義するために、新しい用語「アル・イバーダ(破壊)」を提案します。この用語は、スモトリッチをはじめとする多くのシオニスト・ファシスト指導者たちが用いた恐ろしいレトリックを反映しており、ガザだけでなく歴史的パレスチナ全域で進行中の包括的かつ組織的な抹殺を捉えています。「アル・イバーダ」は、デモサイド、メディサイド、エコサイド、スコラサイド、カルチャーサイドなど、複数の形態の標的型殲滅を包含するほど広範です。

アラビア語でジェノサイドを意味する「アル・イバーダ」は、「すべての人々とすべてのものの絶滅」を意味する「ジャマーイーヤ」という語の語源は、アル・イバーダである。提案されているアル・イバーダという用語は、この語句を意図的に短縮し、永続的かつ決定的な破壊状態を示す概念へと変容させている。特定の地理的位置を特定しているわけではないが、ガザにおけるパレスチナ人への扱いは、質的に異なる形態のジェノサイド的暴力であると主張するパンカジ・ミシュラ(『ガザ後の世界』)の著作から概念的な強みを得ている。ミシュラによれば、ガザは、白人至上主義のイデオロギーを軸に世界秩序を強化しようとする西側諸国の新植民地主義および新自由主義プロジェクトの最前線を構成している。定冠詞を名詞と組み合わせることで、アル・イバーダはこの状況を歴史的な断絶、つまりパレスチナ人の経験と世界の良心の両方における転換点として認識されるべき瞬間であると主張している。

今日、パレスチナでは、「破壊」という言葉はもはや囁かれぬ。軍司令官から政治家、ジャーナリストから学者まで、イスラエル国民の大部分が、パレスチナ人の完全な破壊を究極の目標として公然と受け入れている。

家族全員が殺されつつある。ジャーナリスト、医師、知識人、そして市民社会のリーダーたちが意図的に標的にされている。強制的な飢餓が武器として利用されている。親たちは虐殺を記録するために、子供たちの遺体をカメラの前に運ぶ。ジャーナリストは放送中に殺害される。私たちは自らの破滅の殉教者、負傷者、目撃者、そして記録者になりつつあるのだ。

私の祖母は1948年のナクバを生き延びた。今日、彼女の子供たちとガザ地区の200万人以上のパレスチナ人は、さらに暗い日々、破壊の日々を生きている。

妊娠中のいとこヘバとその家族、そして9人の隣人は、2023年10月13日に殺害された。その時、10月のわずか数日後のことだった。7日には、シェハブ家、バルード家、アブ・アル・リシュ家、アル・アガ家、アル・ナジャーラ家、ハラワ家、アブ・ムダイン家、アル・アザイゼ家、アブ・アル・ハイエ家など、すでに数十の家族が完全に消滅していました。

2023年10月26日、私の親族46人が一撃で殺害されました。昨年の夏までに、その数は400人にまで増えました。そして、私は数えるのをやめました。

いとこのモハメドは、瓦礫の中から子供たちを救出するのに間に合わないのではないかと恐れて、彼らは眠らないでいると話します。「起きているのは、起きていたいからではなく、いつでも掘れるように準備していなければならないからです。」先月、モハメドは空爆で負傷しました。この空爆で、UNRWAのソーシャルワーカーである従兄弟のジャドと、ジャドの義理の妹が亡くなりました。同じ空爆で15歳未満の子ども15人も負傷しました。その夜、過去18ヶ月間、数え切れないほど何度もそうしてきたように、モハメドは瓦礫を掘り返し、彼らの遺体を発見しました。彼は、家族、友人、隣人など、亡くなった人々の顔が毎晩彼を訪ねてくると言います。昼間は古い写真アルバムをめくりますが、今ではどの写真にも空虚さが残っています。一枚たりとも、喪失感に打ちひしがれていない写真は存在しません。夜になると、それらは彼の心に蘇ります。時には優しい夢の中で、しかし多くの場合は悪夢の中で。

今月5月7日、ガザ市の同じ通りにある混雑したレストランと市場へのイスラエル軍の空爆により、数十人が数分のうちに命を落としました。その中には、ジャー

ナリストのヤヒヤ・スベイもいました。彼の第一子である女兒は、まさにその日の朝に生まれました。彼は妻のために物資を買いに市場へ行きましたが、二度と戻ってきませんでした。娘は、父親が殺害されたのと同じ日に誕生日を迎えながら成長することになる。それは、始まったばかりの人生に刻まれた恐ろしい記憶だ。別のジャーナリスト、ヌール・アブド氏は、この戦争で殺害された親族のリストを作成した。彼は5月6日に人権団体にリストを送付し、5月7日には彼自身もリストに追加された。

攻撃を受けたレストランの従業員は、2人の少女がピザを注文した時のことを話した。彼は、彼女たちの会話を耳にしたという。「これ高いわ、すごく高い」と1人の少女がもう1人に言った。「大丈夫」と彼女は答えた。「死ぬ前に夢を叶えてピザを食べましょう。誰にも分からないわ」。2人は笑いながら注文した。注文が届くとすぐに、レストランは砲撃を受け、少女の1人が死亡した。従業員はその後のことを知らない。もう一人の運命はどうか。しかし、彼はピザの1枚が食べられていたことに気づいたと言う。殺された人がそれを味わえたことを願うばかりだ。

これが、このすべて、アル・イバーダだ。破壊だ。

世界的な無策を前に、私たちはほとんど無力だ。

私たちの抗議、涙、叫びはすべて無視されている。

しかし、私たちには言葉だけが残されている。そして、言葉には力がある。1800年代初頭、イギリス軍によるアイルランド語の言語的破壊を記録したアイルランド劇『トランスレーションズ』の中で、劇作家ブライアン・フリエルは、物事に名前を付けることで、それが力を持ち、「現実のもの」になるのだと説いている。だから、最後の絶望として、今年のナクバを記念する時こそ、この出来事に名前をつけ、現実のものにする時だ。アル・イバーダ、破壊だ。

ガダ・アゲル

政治学教授

ガダ・アゲル博士はパレスチナ難民3世であり、現在、カナダのアミスクワチワスカヒカン（エドモントン）にあるアルバータ大学の政治学部の客員教授を務めています。

アルジャジーラの記事より

アル・ナクバ・アル・ムスタミラ（継続するナクバ）： 77年間のスムード（忍耐・抵抗）、不屈の精神、そして 絶望について

アル・ラシッド通りが歩行者通行を再開し、100万人のパレスチナ人が北へ帰還した。（写真：ソーシャルメディア）

2025年5月10日 記事、論評

ベナイ・ブレンド著

被害者が別の無関係な犯罪の加害者になった場合、シオニストがどれだけ和解を望んだとしても、二つの出来事は決して和解することはできない。

過去77年間、パレスチナ人は占領下の生活につきものの様々な二分法を経験してきた。和解できることもあるが、そうでない場合も多い。現在の状況に特有のものもあれば、そうでないこともある。

例えば、回復力と絶望は、シオニスト国家による数十年にわたる民族浄化に対する正常な反応である。

共同体としてのスムードは、パレスチナ人の抵抗運動に役立ち、10月7日以降イスラエル軍による集団懲罰が強化された後もなお、彼らが祖国を離れることを拒否する一因となっている。

イスラエルによるガザ地区と歴史的パレスチナへの侵略は、ほぼ歴史的なレベルに達しているが、多くの人ができるように、パレスチナ人の回復力を美化することには危険が伴う。そうすることで、人々は使い古された決まり文句と化し、誰も負うべきではない超人的な力を彼らに要求することになる。

中には、両立不可能な対立もある。例えば、イスラエルの起源の物語は、入植者による植民地主義の物語によくあるように、ナクバの現実を覆い隠している。詩人ダリー・タトゥールが説明するように、シオニストたちは5月初旬の独立記念日を、花火や祝賀ピクニックで賑わうパーティーで祝う。

一方、パレスチナ人は「この日を（自分たちの）ナクバとして嘆き悲しんでいる」とタトゥールは明確に述べている。「民族浄化の始まり、『自分たちの』村々の破壊、そして難民の創出だ」。

「自由は夢に過ぎないにもかかわらず、私たちは沈黙と誇りの中で苦しみ、ここに留まっている」とタトゥールは結論づけ、絶望の公式に希望と回復力を吹き込んでいる。

シオニストの努力にもかかわらず、1948年に関する二つの歴史観が調和できないのは明らかだ。

毎年5月15日、平和のための戦闘員(CFP)注は合同ナクバ追悼式典を開催しており、今年は「土地を守り、希望を守り続ける」ことに焦点を当てている。

注パレスチナ側の元戦闘員や受刑者とイスラエルがわの元兵士の間で2006年に創立されたNGO

誰の土地なのか、誰の希望なのか？これらの問いに対する答えは、双方の「暴力的な過去」を「処理する」という漠然とした言及以外にはないように思われる。

ここに問題がある。抵抗する法的権利を持つ被占領者の抵抗と、他者に対するジェノサイドを行う権利を持たない占領者の暴力との間に、同等性を見出そうとする動きがある。

ファシズムは投票によって権力から追放されたことはなく、抑圧者のトラウマに耳を傾ける被抑圧者によって克服されたこともない。この考えは、ワルシャワ・ゲットーのユダヤ人は、実際に抑圧者に対して蜂起するのではなく、ナチスをお茶に招いて自分たちの話を聞くべきだったと主張するのに等しい。

さらに、この呼びかけは「現在の流血」を「この地をめぐる長い紛争の歴史におけるもう一つの悲劇的な一章」と形容している。しかし、これは紛争ではない。なぜなら、それは二人の戦闘員が対等であることを意味するからだ。しかし実際には、パレスチナ人はイスラエル人ほどの武器を持っていない。それは、米国をはじめとする国々が、今日まで続く紛争ではなく、ジェノサイドである行為を容認してきたためである。

さらに、この記念碑は互いの物語に耳を傾けることで「暴力の連鎖を断ち切る」ことに言及しているが、実際には暴力の「連鎖」など存在せず、シオニスト国家による民族浄化が継続しているだけである。

最後に、CFPは「和解へのコミットメント」に言及しているが、南アフリカでさえ真実と和解のための公聴会が開かれたにもかかわらず、それはアパルトヘイト終結後に行われた。イスラエルが和解を実現するには、まだ長い道のりが残されている。

将来について言えば、平和のための戦闘員たちは「集団的解放のビジョン、すなわち抑圧された人々が支配から解放され、抑圧者たちが暴力に縛り付けられる体制から解放されるビジョン」を掲げている。

この数段落の中で、CFPは「ジェノサイド」という言葉を一切用いておらず、最後の言葉も「シオニズム」を粉砕すべき体制として言及していない。こうして参加者たちは毎年、適切な名前が付けられることのできないジェノサイドを阻止するために口先だけで行動したことを誇りに思い、記念碑を後にする。

パレスチナ人学者、文化活動家、そして音楽アーティストでもあるハイダー・エイドは、Facebookの投稿で「正常化」を「抑圧や不正義といった、本質的に異常な事柄を、あたかもそれが正常であるかのように扱ったり提示したりすること」と定義している。CFPはそうしたプロジェクトの一つであり、パレスチナ先住民主導の独立闘争を支援するのではなく、シオニスト政権との正常な関係を築くことを目的としている。

エイドは別の場所で、文化プロジェクトと正常化プロジェクトは、「他者を理解する」あるいは「イスラエル世論に〔パレスチナ人の〕権利を納得させる」という名目で行われたこれらの活動は、イスラエルが「積極的に平和を求めている」という誤った国際世論を招いてしまった。さらに悪いことに、これらの活動はボイコット運動を弱体化させ、イスラエルが自らを「民主的で正常な国家」として売り込むことで「過去の犯罪行為を隠蔽」することを許した。

エイド氏は、これらの活動はイスラエルの制度に積極的に対抗するどころか、参加者に共通の問題について単に「対話」するだけで行動を起こしているという「偽りの満足感」を与え、パレスチナ人の自由と正義をいかに実現するかという問題を無視していると結論づけている。

CFPはまた、パレスチナ人とイスラエル人が共に故人を追悼するために招かれる共同追悼式典を後援している。毎年ヨム・ハジカロン(イスラエルの戦没者追悼記念日)の前夜に開催されるこの式典は、参加者が分裂を企てる勢力に対抗して団結し、共に集う場であると主催者は主張している。

既に述べた理由から問題視されているこの合同式典は、シカゴの反シオニスト教会「ツェデク・シカゴ」の会員に向けたブラント・ローゼン師の週刊ニュースレターで指摘されているような、新たな問題を提起している。

Facebookで共有されたブラント師の解説によると、ヨム・ハシヨア(ホロコースト記念日)は、シオニスト国家建国直後にイスラエル議会の法令によって制定された。毎年4月27日に記念されるこの日は、ヨム・ハジカロン(戦没者追悼記念日)へと続く喪の週の始まりであり、ヨム・ハアツマウト(独立記念日)で終わる。

したがって、これは「シオニストの歴史神話を広める」

ことに役立っており、イスラエル国家の樹立はホロコーストの灰の中から生まれた「再生」であり、独立戦争で戦った兵士たちによって可能になったと見なしている。

シオニスト国家が別の集団の土地を奪取することによって可能になったという事実を無視する CFP 主催の共同追悼式は、相容れない二つの哀悼者集団を一つにまとめることに失敗している。

ホロコーストは確かに恐ろしい出来事であったが、過去に起こったことであり、被害者がそれを口実に、別の集団に対するジェノサイドを実行することはできない。被害者が無関係な別の犯罪の加害者になった場合、シオニストがいかにそうしようとも、二つの出来事は決して和解することはできない。

イスラエル人が最終解決策と見なすもの、すなわちパレスチナ人の完全なジェノサイドと追放を実行する中で、この現実は今日まで続いている。

ジェノサイドの脅威にさらされるパレスチナ人は、希望、絶望、喜び、悲しみなど、様々な感情を抱いています。これらはすべて、現在の状況を考えれば当然の反応です。

「和解できないのは、占領地と占領者という、極めて不平等な立場にある二つの集団の間の対話であり、特に今、一方が他方に対してジェノサイドを犯している状況においてはなおさらだ。

第三のアクターは、おそらく自然からの反撃という形で現れるだろう。逆説的に、イスラエルがガザ全域を殲滅させ、イスラエルの支配権を握ろうとする軍事行動を強める一方で、シオニストたちがこの土地を自分たちのものにするために植えた森では、新たな火が燃えている。

イスラエルがガザ、ヨルダン川西岸、レバノンで大人も子どもも生きのまま焼き殺している今、イスラエル自身の森は、外国の援助機関が奪った土地に植えた外来種の木々のおかげで燃えていると、ロニー・カスリルズは説明する。

南アフリカの反アパルトヘイト闘争のベテランであるカスリルズ氏は、入植者たちがかつての景観を再現するために木を植え、そして「民族浄化が始まると、虐殺と破壊の現場を隠すために木を植えた」と指摘する。数百もの村々を破壊し、パレスチナ人の存在の痕跡を消し去ろうとしている」

カスリルズ氏によると、これらの森林は「崩壊しつつあるシオニスト体制の中でくすぶる毒素が灰燼に帰す、まさに象徴」なのだという。

ナクバの日が近づくにつれ、燃え盛る木々は、「置き換えの歴史、沈黙させられた記憶、組織的な忘却の歴史」、つまりシオニストが押し付けてきた偽りの物語とは対照

的に、真の物語は一つしかないことを思い起こさせる。

「エルサレム周辺の炎は、おそらく意図せずとも、いかなる民族も罰を受けずに根こそぎにされることはあり得ないことを私たちに思い出させてくれる」とモハメド・エル・モクタル氏は主張する。「遅かれ早かれ、この土地は再び語り始めるだろう」

ベナイ・ブレンドはニューメキシコ大学でアメリカ研究の博士号を取得しました。著書に、ダグラス・ヴァコフとサム・ミッキー編著 (2017年) 『『故郷も亡命も言葉ではない』: パレスチナ人とネイティブアメリカン作家

アハリー病院に支援を

アハリー・アラブ病院を支援する会

東京都新宿区西早稲田 2-3-18

キリスト教事業所連帯合同労働組合気付

問合せ Fax: 03-3207-1273 (担当: 星山・新名)

メール ayyam_ahli@yahoo.co.jp

振込先)

口座名義: アハリー・アラブ病院を支援する会

郵便振替口座: 00150-7-601525



アハリー・アラブ病院を支援する会 共同代表 村山盛幸・藤田 直
169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18 キリスト教事業所連帯合同労働組合気付 MAIL: ayyam_ahli@yahoo.co.jp

アハリー・アラブ病院を支援する会 ニュース・レター

アハリー・アラブ病院が爆撃された!

2025年4月13日未明(現地時間)にアハリー・アラブ病院がイスラエル軍のミサイル攻撃に遭いました。攻撃の20分前に、イスラエルから攻撃予告があり、入院患者、患者、スタッフは避難することが出来ましたが、患者であった一人の少年が爆撃によるショックで亡くなりました。激しい爆撃により、アハリー・アラブ病院は大きなダメージを受けました。北部で唯一、完全に機能していたアハリー・アラブ病院は、ガザで生きる人びとの命綱です。それを容赦なく破壊し、パレスチナ人を正に監視やしにしようとするイスラエルを我々は許すことはできません。それでも、アハリー・アラブ病院は僅かな医薬品や設備を使って立ち上がりようとしています。どうぞ引き続き支援をお願いします。

スハイラ院長からのメール 2025年4月16日受信

変わらぬお気遣いとお祈りをありがとうございます。
このつらい時、皆さまからのお支えは、言葉が伝える以上の価値があります。
既にご存知かもしれませんが、アハリー・アラブ病院は先日の空襲による大規模な被害が続いています。新設の遺体子供検食棟、救急部門、薬局、外来診療棟など、当院の重要な諸施設が破壊ないし深刻な影響を受けました。現在、当院の救急および外来対応は機能不全に陥り、全面稼働できません。



それでも当院の献身的なスタッフは破壊のさなかにあっても、限られてはいても



ガザにおけるジェノサイド、あるいはアラブ世界の終焉

イスラエルはガザで虐殺を続けている。(写真: QNN 経由)

2025年5月18日 記事、論評

モハメド・エル・モクタール

パレスチナは存在するために抵抗しているのではありません。真実が消し去られるのを防ぐために抵抗しているのです。ガザは立ち向かっています。なぜなら、ガザが陥落すれば、すべてが共に陥落するからです。

イスラエルによるガザ攻撃が始まって以来、怒りのほとんどは西側諸国に向けられています。武器と外交上の隠れ蓑を提供するアメリカ、歴史的曖昧さと道徳的惰性に囚われたヨーロッパ、そして痛みをフィルタリングし、画像の流れを管理するために動員された巨大IT企業です。

これらの批判は正当なものです。しかし、本質的な点を見落としています。虐殺は止められたはずだったのです。そして、それを止められたはずの人々は、アラブ諸国との共謀という構造を巧みに構築したのです。

控えめながらも機能的で、組織的で、合理的な建築。物流、外交、経済。沈黙、偽善、そして洗練された儀礼に覆われた、冷徹な政治的中立化の機械。

一方、パレスチナ人を寄生虫と呼び、ガザを地獄に変えると誓い、資産凍結と引き換えに崩壊したリビアに100万人の魂を追放することを夢想したドナルド・トランプは、アラブ諸国の首都で熱烈な歓迎を受けている。犠牲者の人間性そのものを否定するこの男が、戦略家として歓迎され、平和のパートナーとして称賛されている。

リヤドでは、歓声を上げる群衆の前で、サウジアラビアがテルアビブと国交を正式に結ぶことを希望すると述べた。ガザについては一言も触れなかった。侮辱は構造的なものとなり、屈辱は政策へと変貌する。

帝国は前進し、従属者たちは跪く。彼は数千億ドル規模の武器、エネルギー、AI関連の契約に署名し、カタールからプライベートジェットを受け取る。彼は、訪問中は信者立ち入り禁止だったアラブ首長国連邦のモスクを冒涇した。リヤドでは、まるで皇帝のように戴冠式が行われた。そして、アラブの指導者たちは、この権力を自国民を守るために活用するどころか、服従を深め、自発

的に貧困化し、ガザを見捨てることを選んだ。歴史は決して忘れないだろう。ガザが崩壊する一方で、その消滅の立役者は宮殿で称えられているのだ。

エジプトはラファを封鎖した。人道回廊も、主権に基づく行動も示されていない。シーシ大統領はガザの人々をネゲブに移住させることを提案し、「非武装」パレスチナ国家というイスラエルの言葉をそのまま繰り返した。彼は調停を行わない。ただ従うだけだ。彼は単なるアリバイ工作であり、歯車のようなものだ。オラフ・ショルツ首相の隣で彼の話の話を聞いていると、私は恥や怒りを越えた何かを感じた。それは道徳的な反応ではなく、内面の崩壊、名状しがたい屈辱感だった。言葉そのものが崩壊する瞬間だった。

比類なき力を持つサウジアラビアは、協調中立を実践している。断絶も条件も設けない。皇太子はプリンケン国務長官に対し、パレスチナはもはや自分にとって問題ではないと語ったと報じられている。アル・アラビーヤを筆頭とするサウジアラビアのメディアは、この非人間化に加担している。アブダビもこれに追随し、スカイ・ニュース・アラビアなどの洗練されたプラットフォームを駆使して、同様の偽情報拡散活動を展開している。

UAEはさらに残忍な政策をとっている。彼らは危機を安定化させるのではなく、民主主義の火花を犠牲にして危機を鎮圧する。アラブ世界のあらゆる反革命を支援した。

彼らはイエメンを分裂させ、リビアの政権移行を妨害し、スーダン戦争を煽った。彼らの敵はイデオロギーではなく、あらゆる形態の市民活動や社会自治である。イスラエルの入植地に投資し、軍病院に資金を提供し、独裁者の資金を預かり、災害による収益を洗浄している。彼らのいわゆる中立は仮面であり、裏切りは計画的である。

彼らは人道支援を口実に、移動病院に偽装したスパイ隊に資金提供さえしている。ガザ地区の地下衛生システムへの投資を提案するが、ガザ地区は廃墟と化した住民にとって下水などほとんど問題ではない。これらはイスラエル諜報機関にとっての潜入作戦の口実だ。皮肉は徹底的だ。顔の見えない支配のために、技術、資本、そし

て二枚舌が融合しているのだ。

この戦略に彼らは宗教的な装飾を加える。かつては尊敬されていた聖職者たちが、今やこの政策を神聖化し、精神的な正当性を与えている。かつて倫理と呼ばれていたものが、今や正当化の材料となっている。道徳はもはや議論の対象ではなく、成文化されている。悪は人前で表現され、構造化され、輸出可能になる。これはテクノロジーによる道徳秩序の模倣である。

モロッコもこれに同調する。イスラエルの軍艦を歓迎し、兵士を共同訓練し、ドローン製造を支援している。イスラエルの農業企業は、UAE、サウジアラビア、ヨルダンの企業と同様に、爆撃の間もイスラエル市場への供給を続けている。補給は白昼堂々、公式に、そして何の弁解もなく行われている。

ヨルダンは国境を開放し、サウジアラビアは高速道路を供与し、アラブ首長国連邦は港湾を開放している。イスラエルへの補給路は、間接的ではあるが決定的な攻撃の真っ只中に機能している。これは中立ではない。絶滅戦争の兵站における犯罪的共謀である。

一方、マムード・アッバースは、権力も正統性もない権力を体現している。病院が燃えている間、彼は治安調整を行っている。彼には権限も、国民も、発言力もない。

エドワード・サイドは、冷静かつ厳密なエッセイの中で、ある重要な瞬間を回想している。ニューヨークでマフムード・ダルウィーシュの隣に座り、オスロ合意の調印式を見守った時のことだ。アラファト議長の発言を聞いていると、まるでラビン首相の発言を聞いているかのように感じたという。彼は、あまりにも深い恥辱に、地面に飲み込まれてしまいたいと思ったと記している。

その時、彼は理解した。一つの境界線を越えたのだ。今日、その境界線は常態となっている。ガザはもはや外交問題ではない。記憶と健忘、道徳と管理、主権と隷属の間にある断層線なのだ。

公式のアラブ秩序は揺らいだわけではない。退位したのだ。もはや代表ではない。無力化し、監視し、規律づける。もはや思考しない。複製するのだ。

これは危機ではない。戦略だ。敗北でもない。これは教義だ。秩序を乱すな。流れを守り、痛みを静めよ。

パレスチナは存在するために抵抗しているのではない。真実が消し去られるのを防ぐために抵抗しているのだ。

ガザは立ち上がる。もしガザが陥落すれば、すべては共に陥落するからだ。

そして今日ガザを放棄する者たちは、答えを出さだろう。法廷ではなく、歴史の前で。

責任者たちが、生きていうちに答えを出すことを願う。カメラや共謀する議会ではなく、彼らが裏切った国民の前で。この光景は単に痛ましいだけではない。思考を蝕み、認識を歪め、警戒心を破壊している。私はもうニュースを見ない。疲れたからではなく、拒否感から。これは紛争ではない。これは不正の露骨なシステムなのだ。

時々、西洋の友人たちと議論するのが恥ずかしくなる。私を最も苦しめているのは、彼らの冷笑主義ではなく、私たち自身の崩壊なのだ。アラブの裏切りはあまりにも卑劣なものとなり、あらゆる言論を窒息させている。理性を沈黙させ、声を消滅させている。これは恥辱の極みだ。そして、その恥辱を前に、私は抗議しない。謝罪する。

これはもはや盲目でも妥協でもない。犯罪への加担である。そして、この加担は単に政治的、軍事的ではない。文化的、メディア主導的、そして宗教的なものだ。あらゆる道徳的装いを剥ぎ取られた体制にまで浸透する。今日の悪は組織化され、概念化され、儀式化されている。アラブの公式秩序はもはや単なる裏切りではない。自らの裏切りを理論化し、言語、構造、そして正当性を与える。そして、ひるむことなくそうするのだ。

— モハメド・エル・モクタール・シディ・ハイバは社会政治アナリストであり、アフリカおよび中東情勢を研究対象としている。彼はこの記事のパレスチナ・クロニクルに寄稿した。

UAWC 寄付するには

IBAN (国際口座番号) ES41 1550 0001 2800 0113 1721

BIC/SWIFT: ETICES21XXX

受益者: Bizilur, Asociación Para la Cooperación y el Desarrollo de los Pueblos (Bizilur、人民協力開発協会)

住所: C/ Cardenal Gardoki 9 - 5o Dcha

都市: ビルバオ

重要: 寄付には税制上の優遇措置があります。

Bizilur Asociación Para La Cooperación Y Desarrollo De Los Pueblos への寄付は、個人所得税 (IRPF) の税控除の対象となります。ご質問がございましたら、(+34) 94 433 88 17 または Palestina@bizilur.org までご連絡ください。

اتحاد لجان العمل الزراعي
Union of Agricultural Work Committees



パレスチナ人民のナクバ77周年を記念して、パレスチナ解放人民戦線が発表した政治声明

「パレスチナか、それとも世代を超えて焼き尽くすか」

FPF: 新たなナクバに直面して…私たちは抵抗し、団結し、帰還と解放に向けて前進します。

祖国と海外の、揺るぎない国民の皆さん、
ああ、アラブ国家の自由な人々よ、
世界中の自由な人々よ、

5月15日、私たちはナクバの77周年を迎えます。それは、癒えぬ傷であり、人類史における痛ましい転換点です。シオニスト集団が、植民地勢力の全面的な支援を得て、現代における最も恐ろしい犯罪の一つを犯しました。パレスチナ人の組織的な民族浄化、彼らの移住、数百の都市や村の破壊、そして祖国の廃墟の上に人種差別的な入植者集団を植え付けたのです。

ナクバは、私たちの民族史における転換点であり、シオニスト計画が、パレスチナ人の国民的アイデンティティと存在を消し去り、土地を奪い、パレスチナ人を移住させることを目的とした、人種差別主義的、植民地主義的、そして根こそぎの道具であるという、深遠な啓示でした。その瞬間から、ナクバの諸章は止むことなく、殺戮、虐殺、追放、差別、貧困、そして包囲といった新たな形で続いています。

n 今日、ナクバはガザ地区でより血なまぐさい野蛮な形で再現され、私たちの人々は近代史上前例のないジェノサイド戦争にさらされています。占領軍は、息詰まるような包囲、国際的な共謀、国連の沈黙、そしてアメリカの直接的な協力の中で、病院、学校、避難キャンプを爆撃し、最も凶悪な形の殺戮、破壊、飢餓、そして避難を行っています。

この痛ましい記念日に、人民戦線は、ガザからヨルダン川西岸、エルサレムから1948年の占領地、そしてディアスポラキャンプから強制追放された人々に至るまで、祖国と亡命先に住む私たちの人々の不屈の精神に敬意を表します。それは以下の点を主張する。

第一に、シオニスト国家との我々の紛争は包括的かつ歴史的な紛争であり、我々の人民の完全な民族的権利の実現によってのみ解決される。その核心となるのは、帰還権、自決権、そしてエルサレムを首都とするパレスチナ全土における独立したパレスチナ国家の樹立である。パレスチナ問題は、ナクバの根源が根絶され、占領が終結するまで、アラブ・シオニスト紛争の中核であり続ける。

第二に、ナクバとその波紋に対する真の対応とは、統一された抵抗戦線を構築し、あらゆる形態の抵抗を包含し、武力闘争を最前線とする包括的な国家戦略を策定することである。この戦略は、パートナーシップと民主主義に基づき、国民の総意に基づいた包括的かつ統一された国家的枠組みとしてPLOを復活させ、排他主義と覇権主義への道を遮断し、我々の人々がどこにいてもその力を注ぎ込み、解放と帰還に至るまで占領に抵抗する意志を表明できるようにするものである。

第三に、現在進行中の犯罪の諸相を踏まえ、今日の最優先事項は、ガザ地区の我々の人々に対する絶滅戦争を停止し、彼らの苦しみに終止符を打ち、包囲を解き、復興を開始し、我々の人々の奪うことのできない民族的権利に基づく政治的道を歩み始めることである。

第四に、我々は、「アブラハム合意」、「新中東」といった植民地主義的拡張主義的清算計画、そしてパレスチナ大義を清算しようとするその他の疑わしい計画を装い、新たな「大惨事」をもたらそうとする試みに対して警告する。

第五に、難民問題と帰還権の抹殺を企むシオニスト系アメリカによる陰謀を鑑み、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）の解体を企てる試みに対抗することは極めて重要である。ガザ地区におけるUNRWAへの攻撃——施設と職員の破壊、エルサレムにあるUNRWA機関の閉鎖、そしてヨルダン川西岸地区におけるUNRWAの活動阻止——は、難民問題を解体するための組織的な計画の一環だ。

第六：我々は、オスロ合意とその帰結からの完全な解放を改めて呼びかけます。合意に伴うパレスチナ自治政府の義務を終わらせ、治安調整と抵抗勢力へのあらゆる形態の迫害を停止し、殉教者、囚人、負傷者、解放者の家族への分配に関するあらゆる危険かつ恣意的な決定を撤回し、アメリカ・シオニストの計画へのあらゆる形態の依存を断ち切り、パレスチナ人民の自由意志を体現する統一された闘争の舞台の構築に向けて前進します。

第七：国民の政治家、知識人、そして活力ある人々は、我々の闘争を支持し、国民に対する絶滅戦争に立ち向かい、シオニストという敵とのあらゆる形態の正常化を拒否し、新植民地主義的覇権主義の計画と地域分断の計画に立ち向かうために立ち上がらなければなりません。

第八：長年にわたり侵略と封鎖に直面してきた兄弟愛に満ちたイエメン国民の揺るぎない姿勢に、我々は敬意を表します。彼らは今日も、勇敢な姿勢と国民および公的イニシアチブを通じて、我々の大義を支援し続け、ガザを支援するシオニスト国家の奥深くまで及ぶ新たな抑止力を構築することで、運命と戦場の一体性を確認しています。我々はまた、勇敢なレバノン抵抗勢力にも敬意を表します。彼らはこれまで、そしてこれからも、我々の国民とその抵抗勢力の揺るぎない支持者であり、パレスチナ防衛の戦いにおけるパートナーであり、シオニストの計画に立ち向かう抵抗戦線の結束を確固たるものにしていきます。

第九：ワシントン、ロンドン、マドリード、ブリュッセル、ヨハネスブルグ、そして世界のすべての首都や都市の街頭や大学から、ガザを支援し、侵略を拒絶し、そして我々の人民の正当な権利を支持する連帯の叫びが高まっていることを、我々は深く感謝する。国際的な連帯の高まりは、戦争を止め、包囲を解き、占領の犯罪を暴き、国際レベルで責任を問うための闘いにおいて、前進戦線を形成するものである。

我らが人民よ…ああ、アラブ国家の息子たちよ…ああ、世界の自由な人民よ

ナクバの記念日に、我々は人民、殉教者の魂、捕虜と負傷者に対し、人民戦線が真実の声であり、抵抗の盾であり、国民の不変の財産の守護者であり、そして帰還権の揺るぎない擁護者であり続けることを、改めて誓う。帰還権は時効の対象にもならず、交渉の余地もない。賢人ジョージ・ハバシュはこう言った。「シオニストの菌がアラブの地に残っている限り、私たちの世代の未来を保証することはできない。」

あらゆる分野で抵抗する私たちの人々に挨拶を
占領下の刑務所に収監されている男女の囚人に挨拶を
殉教者たちに栄光と不滅を…そして私たちは必ず勝利する。

パレスチナ解放人民戦線

中央メディア局

2025年5月14日

パレスチナ日誌

3月26日戦争再開9日目:

- ・イスラエルのメディア ハレディムの入隊者はわずか177人で、1万人が不足している。
- ・アル=フーシ: 米国の攻撃、2回の空爆でサーダを標的に
- ・赤新月社 占領軍はアル・ファワール・キャンプで救急隊員を攻撃し、車両を破壊した。
- ・アンサール・アラールは米空母を標的にし、イスラエルの軍事目標を攻撃すると発表した。
- ・59日目、占領軍はトウルカームへの侵略を続けている。
- ・ガザ保健省 侵略再開以来、殉教者830人、負傷者1,787人
- ・サラヤ・アル・クッズは、ガザ周辺の入植地に向けてロケット弾を乱射する。
- ・報告書 エジプトのガザ停戦提案は失敗
- ・1週間に以内に 占領軍はガザ、シリア、レバノンの数百カ所への攻撃を発表。
- ・アル・サラヤがガザからベエルシェバに向けてロケット弾を発射した責任を主張
- ・米国のサマア攻撃

3月27日戦争再開10日目:

- ・国連報告者: イスラエルはガザのパレスチナ人に対して渴きを武器に
- ・ハマスのスポークスマン、アブデル・ラティフ・アル・カヌーの暗殺
- ・イスラエルによるシリア、ラタキヤ空襲6件
- ・レバノン南部でのイスラエル軍襲撃で殉教者
- ・土地の日に、占領軍は2024年にヨルダン川西岸で46,000ドノムを接收
- ・UNRWA: ガザで1日に180人以上の子どもが殺害された
- ・占領軍は、レバノン南部のラドワン大隊司令官の暗殺を発表。
- ・赤新月社 ラファで5日目も9人の救急隊員の消息が不明。
- ・イスラエルがイエメンから発射された2発のミサイルを迎撃
- ・25人の殉教者 - ガザ地区への再度の空襲で殉教者と負傷者が出る
- ・衛星が明かす 米国はイランに対して軍を動員している。
- ・占領軍はヨルダン川西岸地区で市民80人の逮捕と武器の没収を発表。
- ・イスラエル最高裁は、ガザ地区への人道支援を認める請願を却下した。
- ・赤新月社は、行方不明の救急隊員の捜索に全力を尽くした結果、ラファのテル・スルタンに入ることに成功した。

3月28日戦争再開11日目:

- ・ラツァアリーニ ガザは、戦争が始まって以来、最も長い間、物資がない状態にある。
- ・アメリカ、イエメンに数回の空爆を実施
- ・米軍当局者によれば、最近の空爆でフーシ派の指導者数人が殺害された
- ・イスラエルはキアムの町に火炎弾を投下し、ペイルートを爆撃すると脅した。
- ・占領軍はトウルカーム市とその2つのキャンプへの攻撃を61日目も続けている。
- ・新たな虐殺: 占領軍によるゼイトゥーン地区の民家爆撃で14人の殉教、占領軍は67日連続でジェニン市とキャンプへの攻撃を続けている。
- ・ヒズボラは責任を否定 イスラエルのレバノン侵攻継続のための怪しげな口実作りを意図したロケット砲撃
- ・入植者がパレスチナ人オスカー受賞者を襲撃
- ・イスラエル軍がペイルート南郊を標的に空襲を実施。

3月29日戦争再開12日目:

- ・占領軍のガザ侵攻による死者は50,251人に上る。
- ・ジャーナリスト、アル・デブスの強制送還 - アル・アクサで働いていたジャーナリスト10人のIDカードの没収
- ・UNRWA: ガザには3週間以上人道援助が入っていない。
- ・イスラエル軍はヒズボラの司令部と軍事インフラを攻撃したと主張
- ・イエメンのフーシ派を標的とした米国の一連の「集中的」空爆
- ・イスラエル予備役兵士数十人がガザでの兵役を拒否
- ・ガザ地区南部への空爆、赤新月社や民間防衛隊員の消息は依然不明。
- ・ジェニンへの68日間の攻撃... 続く包囲と600戸の家屋破壊
- ・人権委員会 ガザ北部の半分以上が強制避難命令の対象となっている。
- ・占領軍はガザ地区南部の3つの町で市民に「避難命令」を出した。
- ・ヘブライ語メディア イスラエル軍がガザへの大規模攻撃を開始。

3月30日戦争再開13日目

- ・イスラエルが回答書を提出: ハマスがエジプトの新しい停戦提案に同意。

- ・赤新月社 救急隊員9人の消息は7日連続で不明。
- ・イード・アル・フィトルと土地の日の前夜、9,500人以上の囚人がイスラエルの刑務所に収容されている。
- ・サラヤ・アルクッズがハン・ユニスの東でイスラエル軍の車両に仕掛けられた爆発物を爆発させる。
- ・占領軍は、ガザ地区南部のラファにあるアル・ジャンナ地区での地上作戦開始を発表。
- ・米軍戦闘機がイエメンのアンサール・アラール支配地域を7回空襲。
- ・イスラエルによるガザ地区各地への空爆で9人が殉職
- ・イエメンからイスラエルに向けてミサイル2発発射
- ・イスラエルはエルサレムを孤立させ、ヨルダン川西岸を分断する入植地トンネルを承認。
- ・エルサレムに2,200戸の入植地を建設する計画
- ・赤新月社 ラファで収容された遺体の数は11体(うち救急隊員6体)に

3月31日戦争再開から14日目:

- ・ガザ地区南部への空爆と地上攻撃により、子どもを含む数十人が死亡。
- ・カン・ユニスへの集中攻撃で殉教者と負傷者。
- ・イードの礼拝の後、エジプトでは大規模なデモが行われ、同胞の移住を拒否した。
- ・UNRWA ヨルダン川西岸地区における移住の規模は1967年以来前例がない。
- ・赤十字 占領軍によるラファでの14人の救急隊員の処刑に衝撃を受ける
- ・レバノン治安部隊がイスラエルへのロケット弾発射容疑者の逮捕を発表。
- ・夜明けから32人の殉教者... イ・48時間以内に80人の殉教者がガザ地区の病院に到着した。
- ・占領軍は、ガザにあるハマスのトンネルを破壊したと主張している。

4月1日戦争再開15日目:

- ・カッサム旅団がハン・ユニスの東でイスラエル軍戦車の爆発を発表
- ・カッツ: ヨルダンとの国境フェンスの建設に着手し、3年以内に完成させる。
- ・ユニセフ: 停戦崩壊後、ガザで322人の子どもが死亡
- ・入植者がエルサレムのUNRWA本部を襲撃
- ・フーシ派が米軍無人機の撃墜を発表。
- ・WHO、ラファでの援助隊員殺害を非難
- ・数十人の殉教者とパン屋の閉鎖
- ・ヒズボラ イスラエルの急襲、パレスチナ問題担当の党幹部を標的に
- ・数千人が避難するなか、トウルカームとジェニンでは侵略が続いている。

4月2日戦争再開16日目:

- ・イスラエル国防相 ヨルダン川西岸は歴史的イスラエルの中心
- ・ガザのパン屋、小麦粉と調理用ガス切れで全店閉店
- ・ナフタリ・ベネット、2026年の選挙に向けて新党を設立
- ・イスラエル、米国製品の関税をすべて免除
- ・ネタニヤフ首相は、ローネン・バーの副官をシン・ベットの代表代行に任命すると発表。
- ・ドイツ、親パレスチナ支持者の強制送還を開始
- ・占領軍はラファへの大規模な地上侵攻を開始。
- ・ネタニヤフ首相の訪問を前に、ハンガリーはハーグの国際刑事裁判所から脱退。
- ・ジャバリアの虐殺: UNRWA診療所爆破事件で19人の殉教者
- ・ガザの保健省: 24人の殉教者と数十人の負傷者

4月3日戦争再開17日目:

- ・占領軍が ガザから発射された2発のロケット弾を迎撃した。
- ・フーシ派 西部での米国の攻撃で1人死亡、2人負傷、1人行方不明
- ・イスラエル政府高官 最近のシリア空爆はトルコへの警告メッセージだ
- ・ガザ地区南部で数十人が殉教、ラファでは作戦を拡大
- ・占領軍は、ガザ東部の地域に侵入し市民を強制退去させると脅している。
- ・子どもの日」の前夜、ガザでは3万9000人の孤児が飢餓と栄養失調に直面している。
- ・ガザ地区で24時間に100人の殉教者と138人の負傷者
- ・72時間で2機目: イエメン軍、米無人偵察機を撃墜
- ・入植者たちはヨルダン渓谷北部の入植地を拡張し始めた。
- ・21,000人が避難、35人が殉教 - 占領軍はジェニンへの攻撃73日目
- ・イスラエル国防相 ヨルダン川西岸のパレスチナ村落の焼き討ちはテロではない
- ・夜明けから100日: アル・タッファー小学校で27人の犠牲者
- ・占領軍がジャラメ検問所でパレスチナ人を射殺。
- ・占領軍よ: 地上侵攻に備え、ガザでの攻撃を強化している。

4月4日戦争再開18日目:

- ・トルコ イスラエルはテロと混乱を煽っている。

オリブの会通信 第54号(通巻60号)

- ・数十人の殉教者、そしてシュジャイヤとラファへの侵攻
- ・イスラエルによるレバノン南部シドンの空爆で殉教者3名。
- ・占領軍は、68日連続でトゥルカラム市とその2つの収容所への攻撃
- ・イスラエルによるガザ地区南部のハン・ユニスへの空爆で19人が殉教。
- ・イスラエルによるレバノン南部シドンの空爆で、ハマスの指導者が暗殺

4月5日戦争再開19日:

- ・ガザ保健省: 24時間で殉教者86人、負傷者287人
- ・エルサレムのアル・フルカン校閉鎖: 1200人の生徒と120人の職員が大きな困難に直面。
- ・占領軍の保護下にある入植者たちが、ベツレヘム東部の羊飼いを襲撃。
- ・イスラエルの新たな避難命令を受け、数千人の住民がシュジャイヤとタッファ地区から避難。
- ・UNRWA ヨルダン川西岸への攻撃は、1967年以来最大の避難民の波をもたらした。
- ・イスラエル軍がイエメンから発射されたドローンの迎撃を発表。
- ・フーシ派 我々はヤッファの軍事目標を攻撃し、サーダで偵察機を撃墜・数十人の殉教者、イスラエルはラファとシュジャイヤの支配を拡大。
- ・イスラエル、ガザ地区南北での地上作戦拡大を発表
- ・「教育」: 子どもたちや学校の生徒たちは、占領軍に最も狙われている。
- ・レポート エジプトはハマスの完全排除を拒否、ワシントンは復興とハマスの排除を結びつける
- ・ガザで1日に60人の殉教者と162人の負傷者
- ・イスラエルによるシュジャイヤ地区への集中砲撃
- ・エルサレム: 今年第1四半期に5人の殉教者と239人の逮捕者
- ・アルバナーゼ ガザで起きていることは大量虐殺であり、ラファの救護員殺害の証拠は隠されてきた。
- ・ガザでは、主要な水パイプラインが機能しなくなり、深刻な喉の渇きが、エジプトは、ガザへの侵略を止め、停戦合意に戻る必要性を強調。
- ・カッサム旅団がイスラエルの囚人2人を映した新しいビデオを公開。
- ・カン・ユニスの南、キザン・ラシュワン地区に対する占領軍の爆撃で6人の殉教者が死亡した。
- ・ハマス: イスラエル軍がラファで救急隊員を処刑した映像は、そのシナリオを否定するものだ

4月6日戦争再開20日

- ・ガザ東部のシュジャイヤ地区への占領軍の爆撃で3人が殉教した。
- ・米国で拘束されたパレスチナ人活動家マフムード・ハリルは、自らの拘束を“誘拐”と表現している。
- ・占領軍はガザのモラグ回廊で作戦を開始し、ハマスへの圧力を拡大すると脅した。
- ・バニ・スハイラとシュジャイヤ地区へのイスラエル軍爆撃で2人の殉教・UNRWA ガザでは約190万人が強制移住を強いられている。
- ・イスラエルでは政府に対する抗議デモが広まり、囚人の家族はトランプ大統領に訴える。
- ・カン・ユニスのマワシ地区でテントと家屋が占拠され、殉教者と負傷者
- ・イスラエルは、軍と警察による虐待を記録することを恐れ、2人の英国議員の入国を拒否した。
- ・数十人の殉教者とラファの住宅地破壊
- ・占領軍によるアル・フルカン校の閉鎖決定に対し、エルサレムの著名人の決定により授業が再開された。
- ・ガザでは約21の栄養失調治療センターが閉鎖された。
- ・弁護士会 ガザパレスチナにおけるメディアの自由に対するイスラエルの侵害98件(3月中)

4月7日戦争再開21日:

- ・占領軍のブルドーザーがウム・サファ村の入り口を閉鎖
- ・ヘブライ・チャンネル 7,300人の兵士が心理的危機に苦しんでいる
- ・占領軍は過去20日間で490人の子どもを殺害した。
- ・カッサム旅団がアシュドッドへのロケット弾爆撃を発表
- ・ネタニヤフ首相、ガザからのロケット砲への対応を国防相に指示
- ・デイル・アル・バラに避難命令が出され、ハン・ユニスへの空襲で死傷
- ・数十人の殉教者と占領機がジャーナリストのテントを狙う
- ・危険な前例 占領軍はイブラヒム・モスクの聖地の扉に鍵をかけている。
- ・イスラエル当局、アル・アラキブ村を239回目の取り壊し
- ・彼らは占領軍に所属していた - ガザでの戦争犯罪で告発された英国人10人
- ・ガザ戦争が始まって以来、210人のジャーナリストが殺された。
- ・ガザで1日に57人の殉教者と137人の負傷者
- ・占領軍はイブラヒム・モスクのディレクターを召喚し、従業員を逮捕し、別の従業員を国外追放した。

- ・レバノン南部でのイスラエル軍襲撃で殉教者
- ・シシとマクロンは、ガザ合意を回復し、移住を拒否する必要性を強調
- ・ガザでは、妊娠中や授乳中の女性の90%が栄養失調に苦しんでいる。
- ・占領軍がデイル・アル・バラ市内の民家を爆撃した結果、3人が殉教した。
- ・オランダがイスラエルへの軍事輸出規制を強化。
- ・イスラエル: 16便がラモン空港からヨーロッパへガザの人々を輸送
- ・占領軍はイブラヒム・モスクの所長ともう一人の職員を15日間追放
- ・フーシ派は、テルアビブと紅海にいるアメリカの駆逐艦2隻を標的にすると発表した。

4月8日戦争再開22日目:

- ・ガザ: 月曜未明からのイスラエル軍の空襲で42人の殉教者
- ・ジャーナリスト・シンジケート: 侵略開始以来208人のジャーナリストが殺され、3月中にもガザとエルサレムで犯罪が続いている。
- ・ネタニヤフ首相とトランプ大統領、ガザからパレスチナ人を排除する方法を協議
- ・マイクロソフト、イスラエルとの共謀に抗議したエンジニアを解雇。
- ・数十人の殉教者とガザ地区南部・中部での空爆激化
- ・シュアファト・キャンプのUNRWA学校が襲撃され、30日以内に閉鎖すると脅迫された。
- ・占領軍はアスサムの南で2軒の家を取り壊し、他にも5軒の家を取り壊しの危機にさらされている。
- ・占領軍はエルサレムの労連本部を閉鎖し、書記を逮捕した。
- ・ガザの保健省: 過去24時間で58人の殉教者と213人の負傷者。
- ・アルクツズ大学キャンパス内での占領軍との衝突で学生30人が負傷。
- ・Yedioth Ahronoth: 2024年、約1700人の大富豪がイスラエルを去る

4月9日戦争再開23日目:

- ・人権団体 占領軍はガザで1万人以上の市民を逮捕した。
- ・イスラエル最高裁判所は、シン・ベトのトップに対する解任手続きを凍結することを決定した。
- ・エルサレムのUNRWA学校6校が襲撃され、30日間の閉鎖が命じられた。
- ・インドネシア大統領、ガザ支援のため中東5カ国を訪問
- ・米軍機がイエメンの通信施設を空爆
- ・フーシ派、米国の相互攻撃停止提案を拒否
- ・ガザの保健省 ガザ地区の6万人の子どもたちが、深刻な健康合併症の危険にさらされている。
- ・3個大隊を展開... 占領軍はナブルスへの侵略を拡大
- ・侵略による死者数は増加: ガザでは24時間で36人が殉教した。
- ・フーシ派はイスラエルの軍事標的を狙うと発表した。
- ・赤十字 ガザ地区で8人の救急隊員が殺害されたことは、ガザがいかに危険な場所であるかを思い知らされた。
- ・赤新月社 パレスチナ人、バラタ・キャンプを追われる
- ・ガザで本日未明から45人の殉教者
- ・列国議会同盟が全会一致で2国家解決策を採択。

4月10日戦争再開24日:

- ・イッサウィヤでの衝突 - 暴行、窒息、家屋の損壊
- ・米国サヌア空爆
- ・占領軍はタルクミヤ交差点付近で60人の労働者を逮捕した。
- ・殉教者とガザ地区南部とシュジャイヤ地区への攻撃激化。
- ・彼らの警告にもかかわらず、イスラエル空軍のパイロットと兵士は交換取引の完了を要求する。
- ・占領軍、ガザから囚人10人を釈放
- ・ガザで1日に40人の殉教者と146人の負傷者
- ・74日間にわたるトゥルカラムへの攻撃: 家屋は破壊され、4,000世帯以上が避難した。
- ・占領軍はハマスのシュジャイヤ大隊司令官の暗殺を発表。

4月11日戦争再開25日目:

- ・ハン・ユニスとガザへの再攻撃で殉教者と負傷者
- ・国連: ガザでは1万2500人の患者が医療避難を必要としている
- ・米軍によるサヌア空襲
- ・パイロットの請願を受け、150人のイスラエル海軍士官がガザでの戦闘終結を要求。
- ・ハン・ユニスとガザで数十人の殉教者
- ・占領軍はナブルス旧市街を襲撃し、同州の市民3人を逮捕した。
- ・占領軍によるハン・ユニスとペイトラヒアへの空爆で、1家族10人を含む12人が殉教。

- ・ワシントンは2隻目の空母を中東に派遣する。
- ・ガザ 赤新月社が中央診療所で予防接種と妊娠フォローアップサービスを開始。
- ・占領軍はガザ市のいくつかの地域で市民に「避難命令」を出す。
- ・占領軍はジェニン・キャンプ近くの民家に放火した。
- ・イスラエル歩兵部隊がレバノン南部のワザニ公園に進入。
- ・ガザへの連続空襲により、24時間で26人の殉教者と数十人の負傷者
- ・アル・アクサ・モスクのイマームと説教者は、モスクから追い出された。
- ・人権センター イスラエル、ヨルダン川西岸で10日間に97軒の家屋を取り壊す
- ・占領軍はモラグ軸の建設を完了。

4月12日戦争再開 26日

- ・UNRWA ガザは深刻な飢餓に近づいており、幼児や子どもたちは空腹のまま就寝している。
- ・アンサール・アラ、ヤッファのイスラエル軍標的2カ所を無人機攻撃
- ・ラファで数十人の殉教者と家屋の大規模破壊
- ・メタはイスラエルの要請で9万件的投稿を削除した。
- ・国際司法裁判所は、パレスチナにおける国連駐留に対するイスラエルの義務について審理を開始。
- ・ガザ地区で1日に21人の殉教者と64人の負傷者
- ・イスラエルはガザの水と衛生のインフラの90%以上を破壊した。
- ・イスラエル軍は、ガザから発射された3発のロケット弾を迎撃と発表
- ・ガザ市とデイル・アル・バラで市民を標的にした占領の結果、殉教者と負傷者が出た。
- ・国連高官：ガザでは5歳以下の子ども6万人が栄養失調に苦しむ

4月13日戦争再開 27日

- ・ガザ北部の避難民を保護するテントに対する占領軍の爆撃で、3人の殉教者と負傷者が出た。
- ・イエメン中西部を標的とした米軍の空爆
- ・イスラエル軍によるハン・ユニス空爆で殉教者3名と負傷者1名
- ・数十人の殉教者、占領軍は2つの病院を爆撃
- ・占領軍はガザ北部のパプテス病院を爆撃した。
- ・アル・クッズ旅団 ガザ地区中央部でイスラエルの無人偵察機2機を押収した。
- ・過ぎ越しの祭りの初日：数十人の入植者がアル・アクサを襲撃
- ・ガザ：デイル・アル・バラの攻撃で兄弟6人が同時に死亡
- ・宗教的儀式に限定されたベツレヘムの教会、棕櫚の日曜日を祝う
- ・ガザで1日に11人の殉教者と111人の負傷者
- ・ラファの攻撃で行方不明になった救急隊員のアーメド・アル・ナスラは、占領軍に拘束された。
- ・ガザ地区各地への再攻撃で殉教者と負傷者
- ・サラヤ・アルクッズは、107発のロケット弾でラファ南方のイスラエル軍司令部を攻撃。
- ・英国はイスラエルに対し、ガザの医療施設を標的にすることをやめるよう要請。
- ・イスラエル軍は避難命令を更新し、ガザの90の標的を攻撃。
- ・イスラエル軍 イエメンから発射されたロケット弾2発を探知
- ・入植者の襲撃で少女2人が負傷、車がマサファー・ヤッタの市民5人を逮捕

4月14日戦争再開 28日

- ・許可と制限 わずか6,000人：占領軍、エルサレムでのキリスト教徒による聖週間の祝典を制限
- ・イエメンのレジスタンス 我々はロド空港と軍事基地を標的にした。
- ・モサドと軍医が戦争終結を求める書簡に署名
- ・ハン・ユニスとガザ地区中央部で数十人の殉教者
- ・数百人の入植者がアル・アクサで祈る
- ・イスラエル軍 ヘブロンで女性兵士が車突入攻撃で負傷
- ・フーシ派 米軍によるサヌア郊外の空爆で36人が死傷
- ・ガザで1日に39人の殉教者と118人の負傷者
- ・占領軍によるガザ市アル・タファ地区の民家爆撃で6人が殉職
- ・イスラエルの刑務所から釈放された9人の囚人がガザの病院に到着。
- ・トゥルカルムに占領軍が広範囲に展開。

4月15日戦争再開 29日目

- ・Yedioth Ahronoth：戦争終結を求める元大使・高官の嘆願書
- ・ハマス 我々は調停者から受け取った提案を検討している。
- ・ガザ住民の70%がイスラエルからの避難命令を受けている。
- ・米国のイエメン空襲
- ・米特使：イランに3.67%までのウラン濃縮を認める。
- ・ラファとシュジャイヤで数十人の殉教者と家屋の破壊。
- ・米国は、イランのウラン備蓄を第三国に移転する計画を提案している。

- ・占領軍はハマスの指導者の暗殺を発表。
- ・ユダヤ人の過越祭の3日目にアル・アクサ、アル・ブラク、旧市街を侵害
- ・ハーレツ 戦争終結と抑留者の帰還を求める1700人の署名。
- ・UNRWA：在庫が枯渇し、ガザでは再び飢饉の可能性に直面している。
- ・イスラエル海軍に戦争中止を求める嘆願書
- ・1,743人の過激派がアル・アクサを襲撃
- ・ベン・グヴィールと数千人の入植者がイブラヒミ・モスクを襲撃
- ・ガザ北部からネタニヤフ首相：ハマスが消滅するまで戦争を続ける。

4月16日戦争再開から1カ月

- ・米国の新空母が中東に到着
- ・イエメン 米軍による北部と東部への空爆
- ・ガザ市のいくつかの地域を標的とした占領軍の爆撃の結果、殉教者と負傷者が出た。
- ・ガザへの集中空爆により死者は5万1000人を超えた。
- ・元イスラエル警察幹部が戦争終結を要求
- ・過越の祭りの4日目、数百人の入植者がアル・アクサ・モスクを襲撃し、礼拝を行う。

4月17日

- ・イスラエル軍は戦争終結を訴えた予備役医師を処罰した。
- ・ヒンド・ラジャブ財団、訪英中のサールの逮捕状を申請
- ・国連：3月中旬以降、ガザでは50万人が避難生活を強いられている
- ・米国のイエメン空襲
- ・レバノン：イスラエルにロケット弾を発射した3人を逮捕
- ・占領軍は、カン・ユニ、ジャバリ、ベイトラヒアのテント内で数十人の女性や子どもたちを焼いた。
- ・中国とマレーシアは、ガザ住民の強制移住を拒否する。
- ・ガザの血友病患者は、必須医薬品の深刻な不足に苦しんでいる。
- ・国連：ガザ地区に向けて発射された爆弾10発のうち1発が爆発に失敗
- ・ガザで1日に40人の殉教者と73人の負傷者
- ・1,651人の入植者がアル・アクサ・モスクを襲撃。
- ・2週間の中断の後、メコロットの水はガザ市の近隣に再び送水されている。
- ・地域の軍事的緊張の中、サウジ国防相がイランに到着
- ・イスラエルは、ガザ地区南部でハマスとイスラム聖戦の指導者2人の暗殺を発表。
- ・入植者たちはヤッタの東にある古代のカーメル・プールを襲撃。
- ・パレスチナの囚人の日に、占領軍の刑務所で囚人が殉教する。

4月18日戦争の再開から32日

- ・サルマン国王はハメネイにメッセージを送り、サウジはシオニスト組織に対するイスラムの団結を呼びかける。
- ・ガザ地区への再攻撃で殉教者と負傷者
- ・ゴラン旅団がパイロットに合流：戦争を止め、捕虜を返せ
- ・UNRWA：3月2日以来、ガザ地区には援助が入っていない。
- ・米国のイエメン空襲
- ・米政府高官 ワシントン、ダマスカスにパレスチナ諸派メンバーの追放を要求
- ・カーン・ユニスとジャバリアでは虐殺が続き、ラファとシュジャイヤでは家屋が取り壊されている。
- ・イエメン：米軍によるラス・イッサ港空襲で70人が死傷
- ・イスラエル軍 イエメンからのミサイルを迎撃した
- ・メディア 米国は数百人の部隊を撤退させ、シリアにある3つの基地を閉鎖する。
- ・占領軍は82日連続でトゥルカルム市とその2つの収容所への攻撃を続けている。
- ・ナブルス南部にあるアルアルマ山では、入植者たちが道路を舗装し、他の入植者たちもアルアルマ山を襲撃している。
- ・ハーレツ 戦争終結を求める請願書に署名した医師が召喚される
- ・占領軍は、ガザの40の標的を爆撃し、武器庫を破壊したと主張している。
- ・米国のラス・イッサ港攻撃による死者は74人に上る。
- ・フーシ派 我々はベン・グリオン空港付近で弾道ミサイルによる軍事作戦を実施・占領軍はヒズボラ・メンバーの暗殺を発表。
- ・イエメン 米軍による首都サヌア空爆

4月19日戦争再開から33日

- ・サラヤ・アルクッズは、ラファでイスラエル軍兵士と車両を標的にした映像を放送した。
- ・避難民の家やテントの中で何十人もの殉教者が出た。
- ・占領軍はトゥルカルム市とそのキャンプへの侵略を続けている。
- ・約14万人のイスラエル人が戦争中止の嘆願書に署名した。
- ・イスラエルの制限により、聖土曜日のキリスト教徒による聖墳墓教会へのアクセスが妨げられる。



2025年5月20日 記事、特集、詩

ロジャー・シーティ著

この詩は、激しい反抗と哀悼の念を込めた作品であり、謝罪の言葉を覆し、パレスチナ人が長きにわたり耐え忍んできた偽善、暴力、そして非人間化に対峙している。

私たちが十分に白人ではないことを、
金髪と青い目を持っていないことを、
(私たちのほとんどが)「間違っ」宗教を持っていることを、
私たちがパレスチナ人であることを、
私たちがイスラム教徒であり、キリスト教徒であり、世俗的であることを、
私たちがアラブ人であることを、
あなたがたのくだらない映画や本によって悪魔化されていることを、お許してください。
あなたよりもずっと前から、私たちの故郷にいたことをお許してください。

私たちの故郷のオリーブの木、私たちの故郷のトープ、
私たちの故郷の歌を。
私たちの故郷であること、そしてあなたの策略と欺瞞を。
あなたが私たちについてどう思っているか気にかけていないことを、
私たちが完璧な犠牲者ではないことを。
私たちの言語があなたの言語よりも優先されることを、
私たちの言語がより豊かで、より深く、より表現力豊かであることを、お許してください。
あなたの聖なる書物を書いたことを、

あなたが理解できないことを、お許してください。

私たちの怒り、私たちの不平等、戦争

あなたの臆病さ、あなたの純粋さ憎しみを、お許してください。

私たちの戦士たちが、私たちの土地を、私たちの土地を守っていることを、お許してください。

遠くからやって来ては去っていくあなたのテロリストたちを、
お許してください。
あなたの墮落、あなたの不道徳、
あなたの深い無知を、お許してください。あなたたちの凡庸さ、
あなたたちの文化的後進性、そして空虚さを、お許してください。

あなたたちが焼き殺し、生き埋めにした赤ん坊たちを、
あなたたちが寝ている間に殺した母親、父親、叔母、叔父、
娘、息子、祖父母を、
あなたたちが告発を装ったすべての告白を、お許してください。
そして、あなたたちが忙しくも重要な生活を送っている間、静かに死にたくないと願っていることを、お許してください。

本当に、申し訳ありません。

ロジャー・シーティは編集者兼ライターであり、パレスチナ・クロニクル紙とミドル・イースト・アイ紙にパレスチナに関するエッセイや記事を寄稿しています。この記事は彼がパレスチナ・クロニクル紙に寄稿したものです。

おいしいパレスチナ

ザアタルフライ

ザアタルフライは、パレスチナ料理の力強く素朴な風味が加わった、伝統的なフライドポテトのおいしさです。乾燥タイム、スマック、ゴマ、塩から作られる伝統的なスパイスブレンドであるザアタルは、ピリッとしたナッツのような風味を加え、カリカリのポテトを全く新しいレベルに引き上げます。

鍋で作るザアタルフライ

このフライはオーブンで黄金色になるまで焼き、オリーブオイルとザアタルをたっぷりかけて風味豊かに仕上げます。

ザアタルとは？

ザアタル（発音は Zaah-tar）は、アラビア語でハーブのタイムを意味します。ザアタルはオレガノによく似たハーブで、レバント地方、特にパレスチナ、ヨルダン、シラ、レバノンが原産です。ザアタルを使った人気レシピにマナキーシュがあります。

ザアタルはスパイスミックスの名前でもあり、通常は粉末にした乾燥タイムの葉、スマックスパイス、炒ったゴマ、塩から作られています。オリーブオイルと混ぜて使われることが多く、サラダや野菜の調味料として、またはラブネ（水切りヨーグルト）に振りかけて使われることもあります。ザアタルは、ピリッとしたナッツのような風味と土っぽい風味が特徴で、パレスチナ料理や中東料理の多くのレシピで人気の食材です。オリーブオイルと混ぜてパンにつけるディップとしても使われます。ザアタルには、免疫力を高め、肌の健康を改善し、骨を強くするなど、素晴らしい健康効果があります。また、脳への血流と酸素の供給量を増やすことで、記憶力と脳力を高める効果があることが研究で示されています。

調理器具

大きなボウル - ジャガイモとザアタルミックスを混ぜ合わせるため

天板 - フライドポテトを焼くため

材料

ザアタルフライ 材料：ユーコンゴールドポテト、オリーブオイル、ザアタルスパイス



ユーコンゴールドポテト - バターのような食感で、薄い黄金色の皮を持つジャガイモ。焼いたり、揚げたり、マッシュしたりするのに最適です。

ザアタルスパイス - 乾燥タイム、スマック、ゴマ、塩をブレンドした香り高い中東産のオイル。ピリッとした土っぽいナッツのような風味が特徴です。

エクストラバージンオリーブオイル - フルーティーで濃厚な味わいの、高品質のコールドプレスオイルです。

海塩 - 風味をプラスしたい場合（お好みで）。

作り方

ジャガイモのスライス

手順1 | ピーラーまたはナイフを使ってジャガイモの皮をむき、均等な大きさのフライドポテト（厚さ約1.3cm）にスライスします。

ジャガイモにオイルをかける

手順2 | スライスしたジャガイモをボウルに入れ、オリーブオイルを回しかけてよく混ぜます。

ジャガイモにザアタルを振りかける

ステップ3 | ザアタルスパイスと塩を加える。

ジャガイモにザアタルスパイスとオリーブオイルを混ぜる

ステップ4 | フライドポテトにザアタルが均等に絡むように、全てを混ぜ合わせる。

ステップ5 | 用意した天板にフライドポテトを重ねないように並べる（必要であれば天板を2枚重ねる）。

天板に並べたベイクドポテトフライ

ステップ6 | 20～25分焼き、途中で裏返して、こんがりカリッとするまで焼く

焼き上がったフライドポテトにザアタルスパイスをさらに振りかける

ステップ7 | オーブンから取り出し、少し冷ます。お好みで、ザアタルスパイスをさらに振りかけると、より濃厚な風味になります。



今号の内容

77年を経てナクバは続く・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
 ナクバから77年、私たちは新たな勇名を付けます・・・・・・・・・・3
 アル・ナクバ・アル・ムスタミラ・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
 ガザにおけるジェノサイド、あるいはアラブ世界の終焉・・・・・・・・・・8
 パレスチナ人民のナクバ77年を・・記念して・・・・・・・・・・10
 パレスチナ日誌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
 パレスチナの歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
 おいしいパレスチナ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
 トピック・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16



5月20日ロンドンで50万人がデモ



5月15日イスラエル外相の万博イスラエル館訪問への抗議行動



5月15日イスラエルの空軍基地のまえで、パレスチナの殺害された子供の写真を掲げて爆撃の拒否を訴え



5月19日メキシコシティでのパレスチナ支持のデモ



5月15日大阪駅前での抗議行動



5月14日人民戦線のムヒカさん追悼ポスター